

# イスラエル 考古学研究会

ニュースレター

No. 11

2011年3月

## 目 次

2010年度エン・ゲヴ発掘調査報告	間舎 裕生 1
ペルシア時代の北レヴァント ～テル・マストゥーマの事例を中心に～	津本 英利 7
イスラエルの「民間信仰」と考古学 ～エン・ドルの口寄せのできる女性の物語を通して～	高井 啓介 13
「パブリック考古学」への視線 M・ピッチリッロ氏のこと(3)	岡田 真弓 17
エン・ゲヴ出土のヘレニズム土器(2) フィッシュ・プレート Fish Plate	牧野 久実 22
お知らせ	28

# 2010年度 エン・ゲヴ発掘調査報告

間 舎 裕 生

## 1. はじめに

慶應義塾大学イスラエル考古学調査団（団長・杉本智俊慶應義塾大学教授）は、2010年8月2日～25日の間、イスラエル国エン・ゲヴ遺跡において考古学的発掘調査を行なった。

同調査団は2009年度から新たに発掘調査を行なっている（杉本・間舎 2010 参照）。調査区は上の町と下の町の境界にあたると思われるスロープ上（G地区）とテル上で最も標高の高い地点（H地区）の2地区に設定されている。今年度の調査は、これらの調査面積を拡大し、層位ごとの遺構の構造の解明を試みた（図1）。

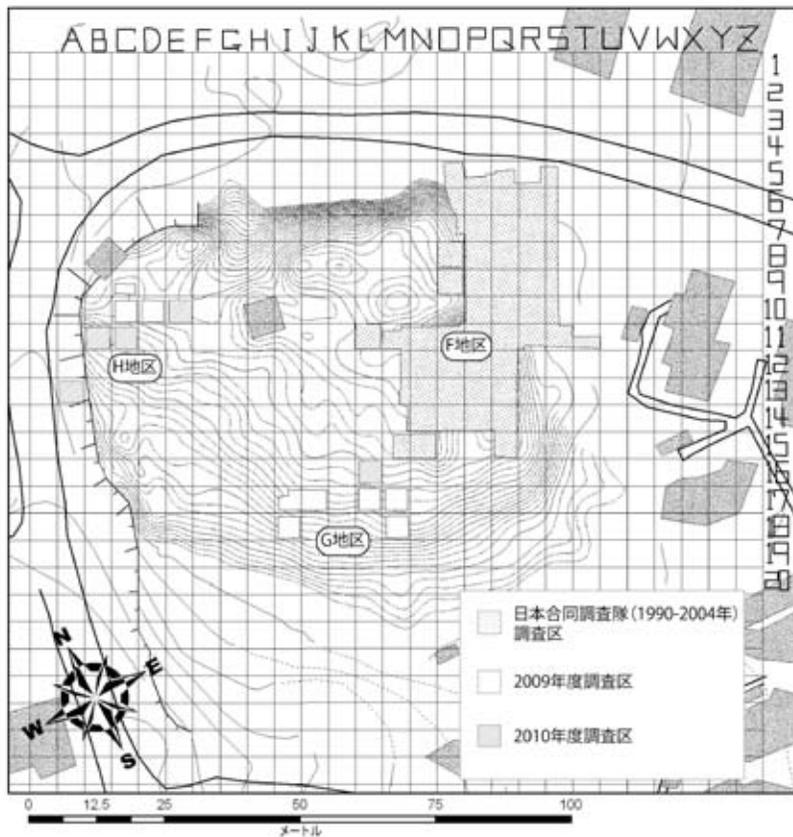


図1

## 2. G地区

昨年度の調査では、L/M17から石の基礎と漆喰で塗られたテラ・ピゼの上部構造をもつ、厚さ約150センチの壁(W105+W123)が出土した(図2)。この壁は東西方向に走っており、1990年から2004年の日本隊の調査によってテル東端に確認されたケースメート式市壁と直交する可能性が考えられた。このため、今年度はW105+W123の北側にもう一つの壁が存在するかどうかを確認するため、L16に調査区を設定し、発掘を行なった。

調査の結果、崩落したレンガの堆積の下から踏み固められた床面(L169)が出土した。この床からの遺物は非常に少ないものの、鉄器時代終盤からヘレニズム時代に当たると考えられる。この床の標高は海面下200.20メートルであり、昨年度壁の南側で出土した床(L117+L122+L152)よりも40センチほど高く、同一のものではないであろう。このため、L169を掘り抜いてさらに調査を行なったが、L117+L122+L152と同じ標高まで達しても遺構

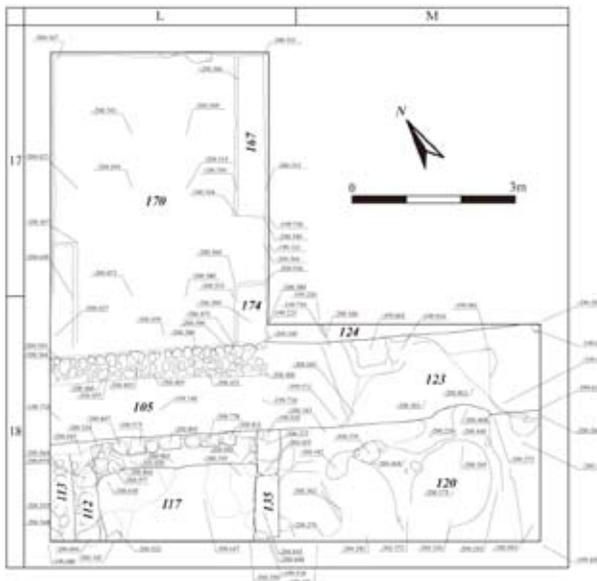


図2 G地区

は確認できず、L16に壁は存在しないということが明らかになった。

この他に、昨年度の調査の際にL17から畔に入り込む南北に並んだ切石の列(W135)が検出されたため、L/M17の畔を掘り抜いてW135まで到達した。その結果、この切石の列は幅約40センチ、長さ約120センチの矩形に整形された石からなることが判明した。W135はW105のテラ・ピゼの上部構造の下に入り込んでおり、両側には漆喰の床L117とL122が接している。このことから、W135はW105やL117やL122と同時期もしくはより以前に造られたと考えられる。

## 3. H地区

昨年度はH地区でC9、C10、D10の3つのグリッドを調査した。その結果、第I層(塔?、ヘレニズム時代)、第II層(ピット、ペルシア時代?)、第III層(漆喰の床、鉄器時代II期)、第IV層(竈と矩形の壁、鉄器時代I~II A期)の4つの層が確認できた。ただし、昨年度の段階では第III層の漆喰の床に接する建物や第IV層出土の竈や壁に接する床には到達できていない。したがって、今年度は調査区をB11、C11、E10に拡大し、漆喰の床に接する建物を確認すること、D10およびC10をさらに調査して、第IV層にあたる遺構の構造を明らかにすることなどを目的として同地区の調査を行なった。

### (1) 第Ⅰ－Ⅱ層

昨年度調査を行なったC10、D10では地表から第Ⅰ層まで約15センチ現代の攪乱が入っていたが、今年新たに設定した3グリッドのうちC11とE10ではそれがさらに著しく、場所によっては2メートル近くの深さにまで達していた。このため、明確なヘレニズム時代の層（第Ⅰ層）とその下のピット群（第Ⅱ層）を確認することはできなかった。

### (2) 第Ⅲa層

H地区全面に広がった漆喰の床は、昨年度は層位が不明確であったが、今年度は2つの異なる層（第Ⅲa層、第Ⅲb層）に分けられることが明らかになった。

上層の床はC11のL614、L621、L622、E10のL617に認められた。C11で検出された床は後代の墓や掘り込みなどによって分断されているものの、標高がほぼ同じであり、元来は一つの床としてグリッドの全面に広がっていたと考えられる。E10はかなり深い場所まで攪乱されており、床（L617）はグリッドの北東端でわずかに確認できたのみである。しかし、L617の直下からは15センチ程の厚さの硬質の土の層が検出されており、漆喰の床の基礎として人為的に盛られたものと思われる。出土土器による時期決定は攪乱のため不確実であるが、鉄器時代ⅡB期（紀元前8世紀頃）にあたりと考えられる。これら上層の床の標高はいずれも海面下200.20メートル前後であり、昨年度C10、D10で検出された床L543、L547のものとはほぼ等しく、床は昨年度想定されていた以上に広範囲に広がっていたと考えることができる。

### (3) 第Ⅲb層

下層の漆喰の床も攪乱のため破壊を受けているが、E10のL629で検出された。これはグリッドの西端に部分的に残存しているのみであるが、元来グリッド一面に広まっていたと考えられる。

B11からは東西方向の壁（W582）と石敷き（L584 + L585）が出土した（図3）。壁の厚さは約120cm、石敷きを構成する石の大きさは約40cmである。W582と同一と考えられる壁は、C11にも継続していた。

この東西方向の大きな壁と石敷きは、1961年のB・マザールらによる調査におけるB地区第Ⅲ\*

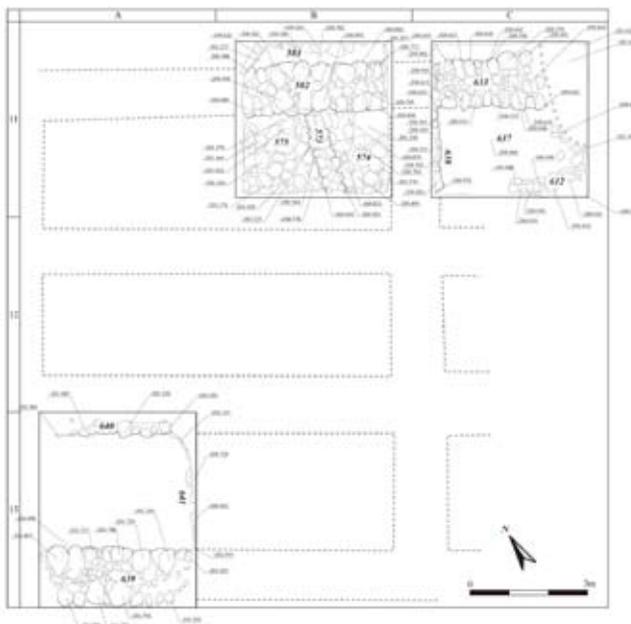


図3 第Ⅲb層（H地区）

層から出土した「要塞」(Mazar et al. 1964: 19)と同様の構造と思われる。マザールらのB地区を本調査隊の調査区に当てはめるとA13になる。両調査で出土した壁を比較すると、幅がほぼ同じで東西に並行に走っており、石敷きの標高もほぼ同じである(海面下201.00メートル)。したがって、これらは一つの大きな建物を形成していた可能性が高い。また、C11西面の畔の中には、畔と並行の南北方向へ伸びる壁(W638)の存在も確認されている。この壁はW638と直交しており、A13の平行する2つの壁(W639、W640)と共に並列した矩形の部屋を構成していたものと思われる。これらの部屋の内側は土盛りの基礎の上に石敷きが設置されていた。

この構造はテル東部で検出されているケースメート式市壁とも合致する。しかし、ケースメートの長辺は10メートルほどになり、このように大きな部屋が単なるテルの擁壁として機能していたかどうかは不明である。上等な石敷きがあることも含め、なんらかの建物の一部を構成していた可能性も残る。

この建築が使用された年代を正確に判断できる遺物は、現代の攪乱のため、十分出土していない。しかし、これがマザールらの第Ⅲ\*層と関連するなら、前9世紀頃と考えることが可能である。

#### (4) 第Ⅳ層

昨年度の調査において、D10東側の部分で、下層の漆喰の床よりも更に下から竈を伴う遺構が検出された(図4)。この遺構の性格を更に解明するため、本年度はD10の西半分およびC10を掘り下げた。その結果、D10からは炭化物を多く含む赤黒い土(L564)の下から床(L580)が検出された。L580では昨年度出土した竈(L557)の他に形の異なる二つの竈(L580、L592)が据えられていたことが明らかとなった。また、この床の上からは30センチほどの厚



図4 H地区D10グリッド第Ⅳ層

さにわたって復元可能な土器が大量に原位置で出土した。これだけ良好な状態で当時の状況が保存されているのは極めて稀なケースであるといえよう。設備の規模の大きさを考えると、昨年度想定したとおりL580が一般の住居ではなく、大型建物の

一部であった可能性が非常に高い。C10 北側の壁 (W578) は D10 東側の壁 (W556) とほぼ同じレベルで直交しており、竈を伴う床とともに一つの建物を構成していたと思われる。

C10 では、下層の漆喰の床の下から矩形の壁 (W578、W579) が検出された。この壁で囲まれた部分からも、D10 同様に炭化物を含む土 (L577) が見られたが、壁に接する床を確認することはできなかった。ただし、炭化した植物遺体が大量に検出された標高は海面下 201.00 メートル前後に集中しており、そこに床があった可能性も否定できない。

第Ⅳ層よりも下の状況を確認するため、C10 の北西端 (L590) 及び D10 の北東端 (L588) に試掘溝を設けて掘り下げた。その結果、C10 の標高 -202.35m まで掘り下げた地点で岩盤直上の自然堆積と思われる層に到達した。したがって、エン・ゲヴの上の町には鉄器時代Ⅰ期以前の居住は存在しないことが明らかになった。

#### 4. まとめ

今年度の調査結果をまとめると次のようになる。

(1) G 地区の L16 に W105 と平行する壁は存在しないことが確認された。したがって、W105 はケースメート式市壁とつながっていない可能性も出てきた。

(2) H 地区では、鉄器時代の層から、明確に 2 つの時期に分けられる漆喰の床が確認された。これらは、本遺跡の層位を考える上で重要な指針となる。

(3) テルの西側斜面に、紀元前 9 世紀頃の南北方向の厚い壁と東西方向の平行する壁、その間の石敷きによって構成された大型建物が存在することが明らかとなった。これは、構造的にはテルの盛り土の擁壁となっており、テル東側で検出されているケースメート式市壁に対応するものかもしれない。しかし、もしそうなら、イスラエルで前例がないほど大規模なものだったことになり、他の機能を合わせもっていた可能性も考えられる。

(4) C10、D10 では、紀元前 11 ～ 10 世紀と考えられる、3 基の竈を伴う遺構が検出された。これは大量の土器や炭化物が原位置で検出されるという極めて良好な出土状況であり、当時の物質文化、土器の年代決定を考える上で貴重な資料となると思われる。

(5) エン・ゲヴの上の町には、第Ⅳ層 (鉄器時代Ⅰ - Ⅱ A 期) 以前の居住は存在しない。

#### 参考文献

間舎裕生・杉本智俊

2010 「二〇〇九年度エン・ゲヴ遺跡 (イスラエル) における発掘調査」『史学』79 号、87-114 頁。

Mazar, B., Biran, A., Dothan, M. and Dunayevski, I.

1964 “‘Ein Gev Excavations 1961,” *Israel Exploration Journal* 14, 1-33.

Sugimoto, D. T.

2010 “Tel ‘En Gev: Preliminary Report,” *Hadashot Arkheologiyot* 122.

杉本智俊

2010 「古代イスラエルとその近隣諸国——2009年度エン・ゲヴ遺跡発掘調査報告——」『第17回西アジア発掘調査報告会報告集』101-106頁。

月本昭男他（編）

2009 『エン・ゲヴ遺跡——発掘成果報告 1998-2004』リトン。

（慶應義塾大学大学院博士課程）



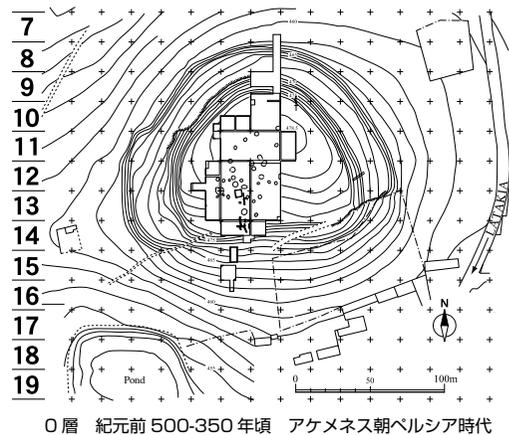
# ペルシア時代の北レヴァント ～テル・マストゥーマの事例を中心に～

津本 英利

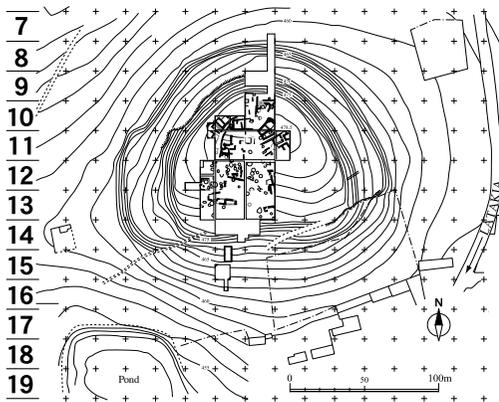
## テル・マストゥーマの発掘調査

古代オリエント博物館は、シリア北西部イドリブ県に所在するテル・マストゥーマ遺跡において、1980年から95年までの8シーズンにわたる発掘調査を行い、2009年に最終報告書を出版した (Iwasaki et al. 2009)。マストゥーマは直径200mほどの典型的な中規模テル（遺丘）型遺跡であり、現在周囲にはオリーブなどの果樹園が広がっている。東へ徒歩一日の行程内には、前期青銅器時代の都市国家エブラとして知られるテル・マルディーフや、ハマト王ザクルによるアラム語碑文で知られる鉄器時代都市テル・アフィスが所在するが、その辺りは穀倉地帯になっており、マストゥーマは石灰岩丘陵上の果樹栽培地帯と平野部の麦作地帯の境界上に位置する。

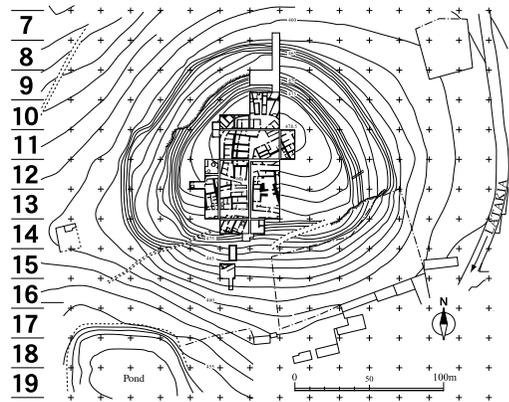
1980～88年の前期調査では層位の確認が主な目的とされ、鉄器時代から前期青銅器時代に至る集落の存在が確認された。1993～95年の後期調査では、遺丘頂上に厚く堆積する鉄器時代集落構造の解明が主目的とされ、鉄器時代Ⅱ期、すなわち紀元前9世紀頃に属するI-2層では、同時代のイスラエルのベエルシェバⅡ層の集落と規模も構造もきわめてよく似た、環状街路



0層 紀元前500-350年頃 アケメネス朝ペルシア時代



I-1層 (紀元前700-650年頃 鉄器時代Ⅲ期)



I-2層 (紀元前900-700年頃 鉄器時代Ⅱ期)

図1 テル・マストゥーマ 遺構の変遷

を有する集落の姿が明らかになった。この I-2 層の集落は、続く I-1 層になると南半分が放棄されて徐々に縮小し、紀元前 7 世紀前半頃に廃絶したようである。遺構のプランや土器型式を見る限り、I-2 層と I-1 層にはある程度の連続性が認められる (図 1)。

ところがこの後期調査では、前期調査では手付かずだった遺丘頂上部の南半分に、鉄器時代以後の層が存在することが確認された (図 2)。I 層よりも後ということで「0 層」と名づけられたこの層は、遺構がきわめて貧弱または残存状態が悪く、灰混じりの土を含むピットが数多く存在する。後述するが、この 0 層は紀元前 5 世紀頃のアケメネス朝ペルシア時代に属すると考えられる (Wada 2003)。

0 層の遺構 (図 3) は、日干し煉瓦積みの半地下式単室建築と、残りの悪い石列を中心として、その周囲に多数のピット、墓坑 3 基、石積みの壁面を持つ円形遺構 2 基が点在している。墓は青銅製の腕輪・足輪やアッティカ (ギリシア) 産スキュフォスなどの副葬品を伴う土坑墓 (1 号墓)、アンフォラを転用した子供の甕棺墓 (2 号墓)、それとロバを埋葬した土坑であった。ピットのほとんどは用途不明であるが、例外的に底面から 12 個体分以上のアンフォラの破片が出土し、かつ壁面がプラスターで塗られていたピットがあった。貯蔵・輸送用甕が並べられていた貯蔵用の土坑であったと考えられる。また円形遺構もおそらく穀物貯蔵穴であろう。

### シリアにおけるペルシア時代研究

アケメネス朝ペルシア帝国時代のシリアは、レバノンやパレスチナ地域と共にアバル・ナハラ (「(ユーフラテス) 河の向こう側」の意) と呼ばれる属州をなしており、バビロニア、エジプト、小アジア、そして地中海の結節点となる交通上の要衝であった。

ところがこの地域のペルシア時代の考古学研究は、発掘数の多いイスラエルですら割合おこなわれているようであるが (牧野 1997)、シリアではさらに知見が限られている。その原因の一つとして、イスラエルと共通し、また上記の通りマストゥーマにも見られる現象であるが、鉄器

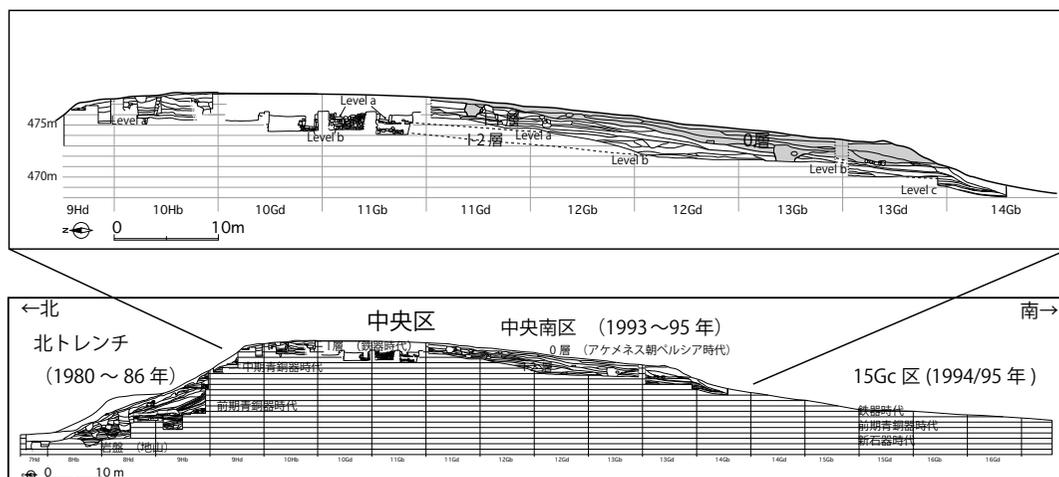


図 2 テル・マストゥーマ断面図 (網がけ部分が 0 層)

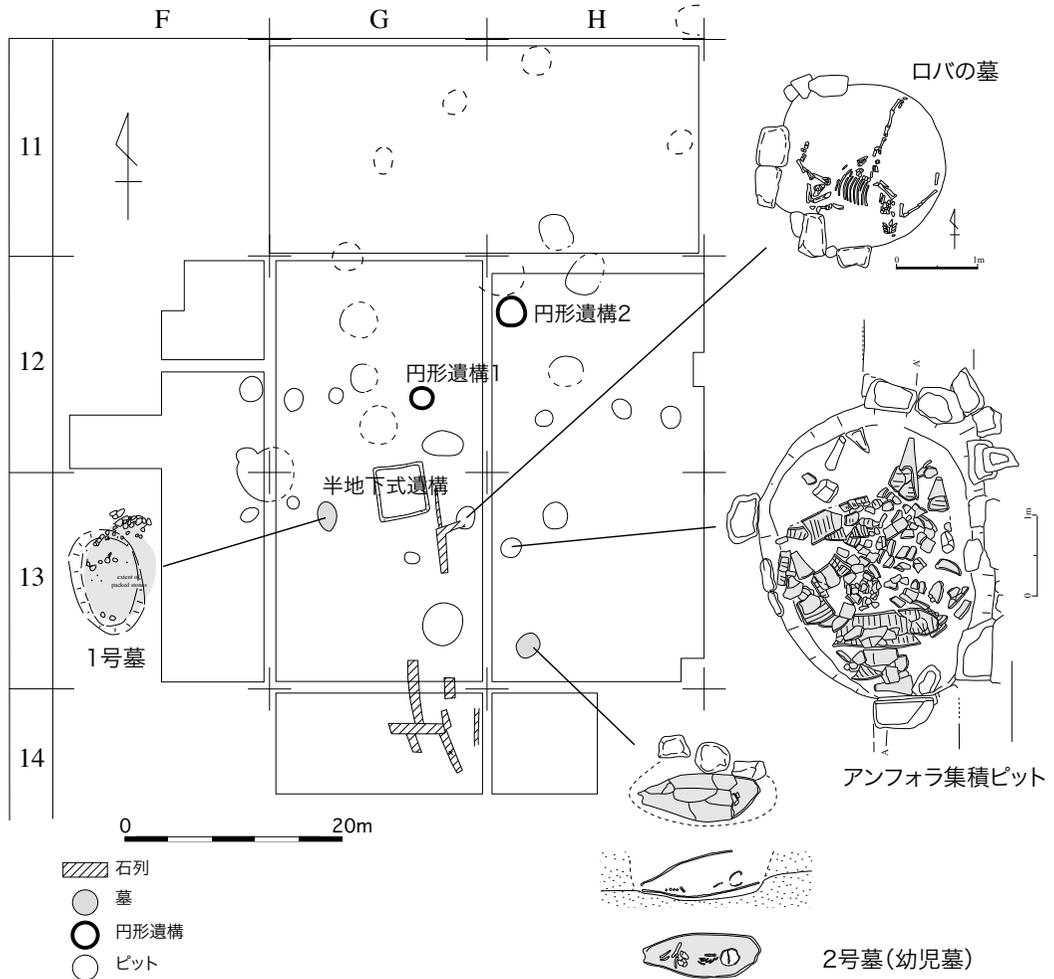
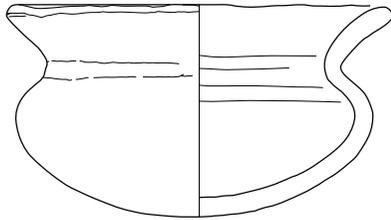
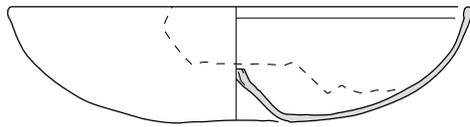


図3 テル・マストゥーマ0層の遺構

時代に栄えていた集落が衰退し、ペルシア時代に属する遺構がきわめて貧弱、あるいは残りが悪いことが挙げられる。海岸部ではレバノンのフェニキア都市や、ギリシア人入植地のあったアル・ミナなどの発掘調査例があるが、内陸部ではまとまった集落址の発見例はなく、気候が悪化して無人の地になっていたとする説さえある。

ペルシア時代の墓地群がテル上に営まれることがあり、ラス・エル・バシットやカーミド・エル・ローズ、デヴェ・ホユックで墓地群の発掘が行われているが、そこに葬られた人々はどこに住んでいたのかという問題が残る。またマストゥーマ近くのテル・マルディーフやテル・デニートでは、ペルシア帝国の総督居館と思われる施設が単独で発見されているが、集落は伴っていない。

ペルシア時代のレバノン・シリアを専門とする *Transeuphratene* 誌が1989年に創刊され、ついで1996年にドイツのG・レーマンが後期鉄器時代（紀元前700～300年頃）のシリア・レバノンにおける土器編年を概観する研究を刊行し（Lehmann 1996）、シリアにおけるペルシ



0 10cm

図4 テル・マストゥーマ0層出土の青銅製碗(上)・  
ガラス製碗

に紹介した輸送用・貯蔵用甕が多く出土することもあわせ、マストゥーマでワインやオリーブ油、穀物などの集積が行われ、また消費が行われていたことを示す。

貧相な遺構に対してこのような出土遺物があることはどう説明出来るだろうか。マストゥーマ報告書刊行の中心となった和田久彦は、マストゥーマに宿駅のような施設があったと考えている(和田2004)。アケメネス朝は広大な帝国を統治するために駅伝制度を整備したことで知られるが、ペルセポリス城砦文書の分析によれば、宿駅では貴顕や公務による旅行者に対してワイン、ビール、穀物などの支給が行われ、また早馬用の馬や輸送用のラバなどが提供されたことが判明している(川瀬1998)。遺構に比して不相応に多い貯蔵容器や酒器・輸入陶器など

ア時代研究は新たな段階へ入った。そのような中、マストゥーマ0層の発見は、中規模遺跡でのペルシア時代の集落の姿を示すものとして注目されている(Nunn 2004)。

### マストゥーマのペルシア時代

貧相な遺構とは不相応に、マストゥーマ0層からは豊かな遺物が出土している。青銅製フィアラ杯、ガラス製碗など、酒宴に関わる遺物(図4)が出土するほか、40点以上のアッティカ産黒色陶器片が出土している(図5)。アテナイにおいて編年研究が進んでいるアッティカ陶器により、0層の年代は概ね紀元前5世紀半ばから紀元前4世紀の間に収まることが判明した。上

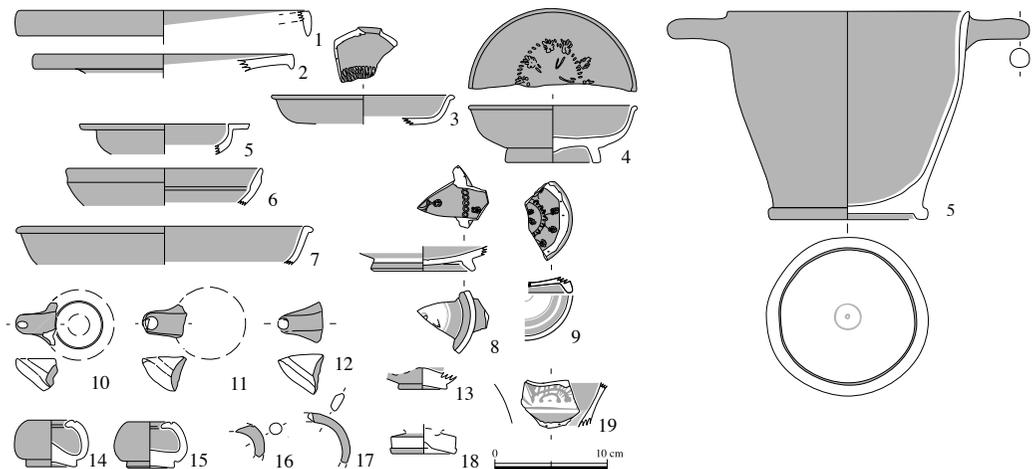


図5 テマストゥーマ0層出土のアッティカ黒陶

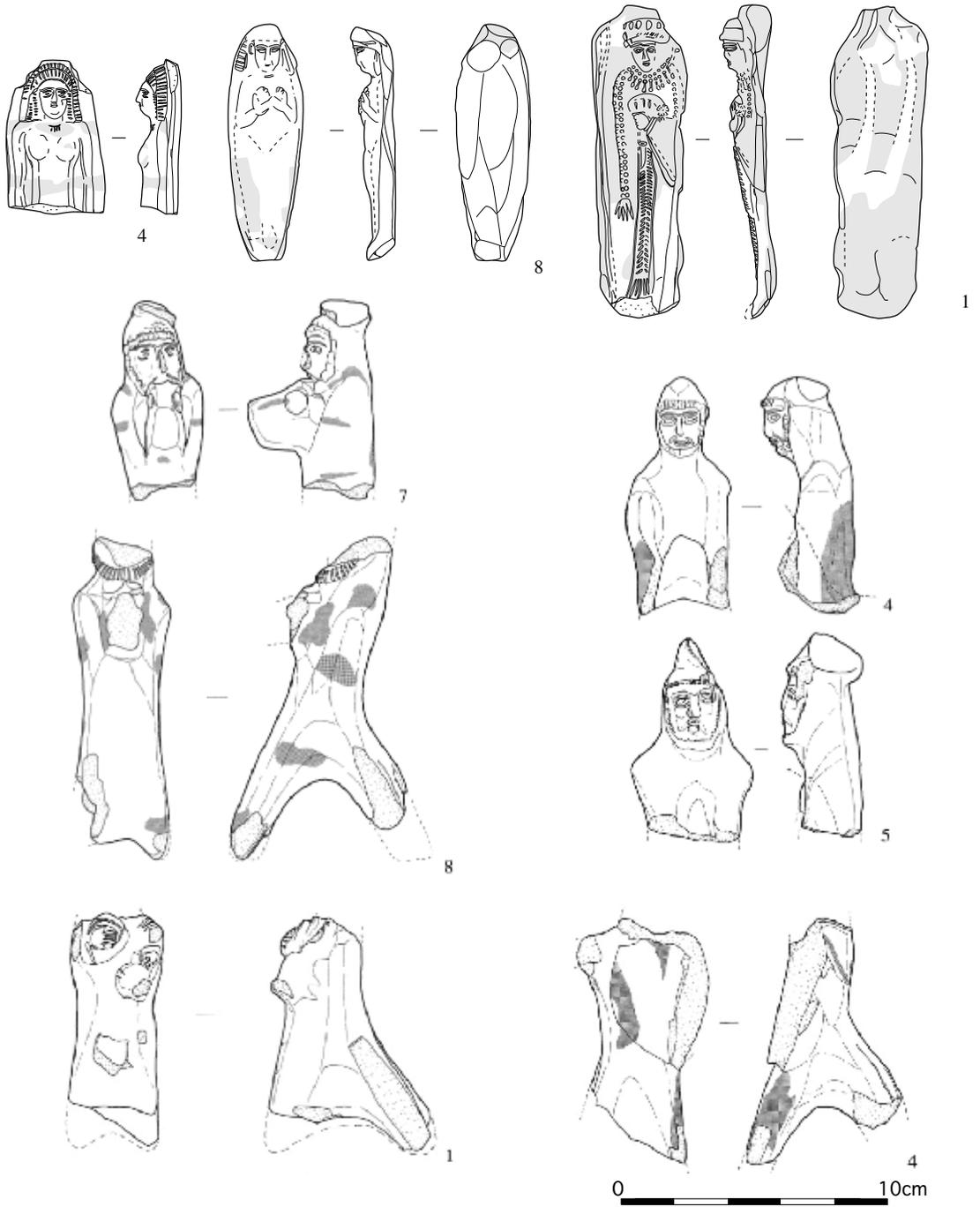


図6 テル・マストゥーマ0層出土の土偶

の貴重品は、そのような場で提供されたものであろうか。またロバの埋葬は、旅上で斃死したロバを葬ったものかもしれない。無人の地となっていたマストゥーマに宿駅が設置された背景として、紀元前 400 年前後にペルシア帝国西部で相次いだ反乱により、シリアが対処のための前線として重視された結果と考えたい。

0 層からはいわゆるアシュタルテ像や騎馬人物土偶が大量に出土しており（図 6）、交通のみならず宗教・信仰上の結節点でもあったことを窺わせる。こうした土偶は商品としてシリア地域内を流通していた（Pruß 2000）。シリアにおけるペルシア時代土偶、特に型押し成型土偶には、人物表現などにギリシアからの影響が指摘されている。一方でその宗教的背景はおそらくイスラエルやオリエント世界と軌を一にするものである。

シリアにおけるペルシア時代研究で非常に参考になっているのが、イスラエルにおける先行研究である。今後もイスラエルとの比較研究を進めてゆく必要を感じている。

## 参考文献

川瀬豊子

1998 「ハカーマニシュ朝ペルシアの交通・通信システム」『岩波講座世界歴史』2・オリエント世界、301-318 頁

牧野久実

1997 「ペルシャ時代のエン・ゲヴ」『史學』第六六卷第二号、153-168 頁

和田久彦

2003 「アケメネス朝時代のマストゥーマ」『オリエンテ』28、24-29 頁

Iwasaki, T., Sh. Wakita, K. Ishida and H. Wada, eds.

2009 *Tell Mastuma: An Iron Age settlement in Northwest Syria*. Ancient Orient Museum, Tokyo.

Lehmann, G.

1996 *Untersuchungen zur späten Eisenzeit in Syrien und Libanon. Stratigraphie und Keramikformen zwischen 720 bis 300 v. Chr.* Münster.

Nunn, A.

2004 Review to Wada 2003, *Abstracta Iranica* 27.

Pruß, A.

2000 Patterns of Distribution: How Terracotta Figurines were traded. *Transeuphratene* 19.

Wada, H.

2003 The Pottery and the Remains of Stratum 0 (Achaemenid Persian Period) at tell Mastuma in Northwest Syria, *Bulletin of the Ancient Orient Museum* XXIII, 31-74

(古代オリエント博物館)

【第13回研究会発表要旨】

## イスラエルの「民間信仰」と考古学

～エン・ドルの口寄せのできる女性の物語を通して～

高井 啓介

神が語る声をどのように聞き分けるか。神の側が人に語りかけてくるときにはそれでよい。しかし、人が神の意思を知ろうと欲するにもかかわらず神が黙しているときにはどうすれば良いのか。ヘブライ語聖書には、神の意思を人間が特別な技術や託宣によって探りだそうとする場合がしばしばある。サムエル記上 28 章はそのようなケースが物語の形で伝わったものである。

テル・レヘシュ遺跡から程近い丘にエン・ドルという遺跡がある。サムエル記上 28 章には、このエン・ドルの地にひとりの霊媒の女性がいて、そこを拠点として霊媒行為を行っていたとある。霊媒・口寄せとは、死者の霊をわが身に憑依させて、その人の声となって語ることである。聖書新共同訳（日本聖書協会）を参考にしながら、まずこの物語のあらすじを追ってみよう。

<sup>4</sup>ペリシテ人は集結し、シュネムに来て陣を敷いた。サウルはイスラエルの全軍を集めてギルボアに陣を敷いた。<sup>5</sup>サウルはペリシテの陣営を見て恐れ、その心はひどくおののいた。<sup>6</sup>サウルは主に託宣を求めたが、主は夢によっても、ウリムによっても、預言者によってもお答えにならなかった。<sup>7</sup>サウルは家臣に命令した。「口寄せのできる女を探してくれ、その女のところに行って尋ねよう。」家臣は答えた。「エン・ドルに口寄せのできる女がいます。」<sup>8</sup>サウルは変装し、衣を替え、夜、二人の兵を連れて女のもとに現れた、サウルは頼んだ。「口寄せの術で占ってほしい。あなたに告げる人を呼び起こしてくれ。」(4-8 節)

さてこのテキストで「口寄せのできる女」と訳されているのは、ヘブライ語で「エシエト・バアラト・オブ」というフレーズである。また、「口寄せの術で占う」というのはこの「オブ」によって占う（カーサム）ということなのである。この「オブ」に関してはヘブライ語聖書で以下のような用例がある。

1. 「霊媒、口寄せ」という人物（レビ記 19:31; 20:6; 申命記 18:11 etc.）
2. 「霊媒・口寄せ」という行為（列王記下 21:6; 23:24; 歴代誌下 33:6 etc.）
3. 「霊媒師・口寄せ」が操る「(死者の) 霊」（イザヤ 8:19; 19:3; 29:4 etc.）

「口寄せの術によって占う」という翻訳は、上の 2. に依拠したものであるが、上の 3. のケー



Jacob Cornelisz. van Oostsanen 1526 油彩・パネル  
Rijksmuseum アムステルダム

スにとって、「死者の霊によって占う」という訳でも決しておかしくはない。<sup>1)</sup>

この「オブ」に対しては、H・ホフナー (Hoffner, H. A., Jr., "Second Millennium Antecedents to the Hebrew 'ob,'" *Journal of Biblical Literature* 86, 1967: 385-401) 以来、そこを通過して死者の霊が行き来する冥界への入口としての「穴」である可能性が指摘され、相当数の注解書などにおいてもその

議論に沿った解釈がなされている。周辺世界のヒッタイト、アッシリアの儀礼テキスト、バビロニアのギルガメシュ叙事詩のテキストなどに、この「穴」は言及される。ホフナーはイスラエルの場合にもこのことが類推的に適用されるとし、「エシェト・バアラト・オブ」すなわち「バアラト・オブ」である女性を「穴を管理・所有する女性」と読むのである。彼女はこの「穴」を行き来する霊を操って彼女に期待される口寄せ行為を行うということになる。考古学的にもしこの「穴」が確認されるならば、ホフナー説は極めて興味深い。ただし、現実的には、穴が発掘のなかで現れるとしても、そのような穴を冥界の入口の「穴」と意味づけることは不可能に等しい。

ところで、エン・ドルの口寄せの記事の要点は、サウル王がペリシテとの戦いに際して、ヤハウエの意思を知ろうとして託宣を求めたことにある。夢、ウリム（とトンミム）および預言者を通して神の意思を問う（シャーアル）ことは、ヘブライ語聖書のなかに少なからず言及があり、それらの行為は神託うかがいの行為として正当とされ推奨されるものでもあった。それに対して「死者の口」を通して神の意思を知ろうとする（具体的には死者の霊と交信することによる）霊媒・口寄せ行為は、多くの周辺宗教に類似の現象が観察されるゆえか、ヘブライ語聖書では極めて否定的な評価を受け、排除されることが要請されている（レビ 19:31; 20:6, 27; 申命記 18:10-14 など）。実際のところサムエル記上の前記引用部分の直前にも次のような記述がある。

サウルは、既に国内から口寄せや魔術師を追放していた。（3節）

イスラエルの宗教研究においては、ある行為が追放・排除されるべきであるといった否定的評価を受ける場合、それをヘブライ語聖書の公式の宗教的立場から外れた民間レベル

の信仰に属するものであるとする、いわば二分法的な整理が伝統的に行われてきている (F. Stavrakopoulou, “‘Popular’ Religion and ‘Official’ Religion: Practice, Perception, Portrayal,” in F. Stavrakopoulou and J. Barton, eds., *Religious Diversity in Ancient Israel and Judah*, T&T Clark, 2010, 37-58)。エン・ドルの女性の行った口寄せ行為もやはり民間信仰のレベルに属するものであるとされることが多い。そのような理解は果たして適当なのだろうか。サムエル記上 28 章は続く部分で口寄せの過程と結果を伝えている。

<sup>11</sup> 女は尋ねた。「誰を呼び起こしましょうか。」「サムエルを呼び起こしてもらいたい。」と彼は頼んだ。<sup>12</sup> その女は、サムエルを見ると、大声で叫び、サウルに言った。「なぜわたしを欺いたのですか。あなたはサウルさまではありませんか。」<sup>13</sup> 王は言った。「恐れることはない。それより、何を見たのだ。」女はサウルに言った。「神のような者 (エロヒーム) が地から上って来るのが見えます。」<sup>14</sup> サウルはその女に言った。「どんな姿だ。」女は言った。「老人が上って来ます。上着をまとっています。」サウルにはそれがサムエルだと分かったので、顔を地に伏せ、礼をした。(11-14 節)

実際には、エン・ドルの女性が口寄せによって呼び出した霊は、サウルの祖霊としてのオブではなく、むしろエロヒームとされる。エロヒームは周知のように「神」を指す語であるが、「神のような威厳を持った存在」に対しても使われることがある。彼女が呼び出したのはサムエルというエロヒームであった。サムエルは言うまでもなくサウルに油を注いでイスラエルの初代の王とした預言者である。神の意思を知ろうとした手段は、ヘブライ語聖書の複数の箇所でも否定され、28 章 3 節でも改めてそのことが確認されているように、ヘブライ語聖書を支配する論理からいえば正当な手続きではない。しかし、このエピソードの結果として生じたことは、預言者を通して神の意思がサウルに告げられたことであって、そのこと自体はヘブライ語聖書の許容する範囲のなかにある宗教現



Salvator Rosa 1668 油彩・画布  
ルーブル美術館 バリ

象であったと言ってもいいかもしれない。本来であれば排除すべきであった現象に関するこのような物語が聖書中から取り除かれなかった事情はいろいろと説明されうるが、この記事を残しても支障がないほど霊媒行為の広がりには限定的だったのかもしれない。いずれにしろ、イスラエル宗教はヘブライ語聖書に書かれている以上の多様性を持っていたことはおそらく明らかである。近年はこの多様性を「公的」vs「民間」という二項対立の図式ではなく、ヤハウェ信仰の目指す範囲内での多様性として理解していこうという傾向が強くなりつつある。(F. Stavrakopoulou 前掲書 p. 47-50)。

それではこのようなイスラエル宗教の多様性は具体的にはどのようにして明らかになっていくのか。ヤハウェ主義的な宗教性が排除しようとしたモノとコトの解明には、宗教関連考古資料が寄与するであろう。少なくとも、ヘブライ語聖書が覆い隠そうとしたイスラエル宗教の多様性に光を当てる手がかりとなる。宗教関連考古資料は、ヤハウェ主義の意図的な取捨選択を経ていない、いわば生の素材である。霊媒行為を含む死者の力に対する信念のばあい、追求すべき考古資料は、葬制と副葬品が中心となろうか。

口寄せが使用したかもしれない「穴」の確認は現実的でないにせよ、考古学が発見してきた宗教にかかわる遺物が、古代イスラエルの宗教的環境に関して、ヘブライ語聖書が記す宗教とは異なるイスラエル宗教の側面にも光を当ててきたことは間違いがない。イスラエル宗教研究に浸透しつつある二分法からの脱却は、そのような考古学的発見に多くを負っているのである。

注1) 本発表の際にコメントで指摘があったように、月本昭男氏 (A. Tsukimoto, “Peace for the Dead or *kispu(m)* Again,” *Orient* 45, 2010, 105-106) は、アッカド語の *abu* が「父祖の霊」として地上に出現することに対する明確な言及が存在することを、古バビロニア時代後期のオーメン・テキストを用いて例証している。この箇所「オブ」も、この *abu* からの類推により、「(祖霊としての) 死者の霊」と考えることが説得的であるかもしれない。

(慶應義塾大学言語文化研究所兼任講師)

【「パブリック考古学」への視線】

## M・ピッチリッロ氏のこと(3)

岡田 真弓

【「パブリック考古学」への視線】というテーマでM・ピッチリッロ氏の活動を振り返る連載の最終回です。パブリック考古学とは「現代社会と考古学が包含する諸問題について取り扱う学問」（松田・岡村2005）と定義することができます。ピッチリッロ氏が考古学を通じて社会に働きかけてきたことは、ひとつのパブリック考古学の在り方だと言えるのではないのでしょうか。今回は、「教育」「観光」「普及」という三つの視点から、ピッチリッロ氏のパブリック考古学活動について論じたいと思います。

### 1. はじめに

これまで述べてきたように、ピッチリッロ氏は、キリスト教考古学研究の第一人者の1人と言っても過言ではない。その中でもトランス・ヨルダン地域のモザイク研究にはおいては多くの著書を残している。特筆すべきは、氏がモザイクに関する発掘調査・研究・修復・展示までを総合的に推進してきたことである。こうした彼の功績は、現在でもヨルダンのネボ山、マダバ、ウム・アル・ラサス、またパレスチナ自治区のエリコ等で見ることができる。ピッチリッロ氏が行ったモザイクを中心とした考古学と地域社会（または外部世界）を結びつけた活動は「教育」education、「観光」tourism、「普及」outreachingの3点に集約することができる。本稿では、ピッチリッロ氏とモザイク調査について概略を述べてから、上記の3点について述べていく。

### 2. ピッチリッロ氏とモザイク研究

20世紀初頭よりフランシスコ修道会の考古学研究の中心は、専らエルサレムであったが、1973年にヨルダンのネボ山にフランシスコ修道会考古学研究所（Franciscan Archaeological Institute. 以下FAI）が置かれると、ヨルダンでの本格的な考古学調査が開始された。ピッチリッロ氏も調査隊の一員として当地に赴任した。最初の仕事として、モーセ記念教会堂遺構から検出された7世紀頃の聖堂納室の修復に携わった際に、6世紀のものと思われる碑文付きのモザイク床が検出された。モザイクに刻まれた碑文や図像からは、当時のトランス・ヨルダン地域の信仰や社会の様子を垣間見ることができるため、モザイク研究はその後のFAIの考古学研究において、重要な位置を占めることになる。

ローマ・ビザンツ時代のモザイク調査研究において一躍中心的存在となったFAIは古代より「モザイクの都」として栄えたマダバにおいても調査を開始した。マダバは「マダバ・マップ」と呼ばれるパレスチナ地域の地図が描かれたモザイク床を有する聖ジョージ教会、処女マリア教会、ヒッポリュトス・ホール、宮殿跡があり、6世紀から7世紀にかけて作られた美しい



マダバ考古学公園内にある教会堂のモザイク展示

モザイクが現代の町中に残っている。ピッチリッロ氏はヒッポリユトス・ホール、宮殿跡及び処女マリア教会堂の調査に携わりながら、聖ジョージ教会に残るマダバ・マップについても研究を進めた。更に1986年より、ウム・アル・ラサス遺跡の調査も開始した。ウマイヤ朝における当該地域の宗教観を示す事例研究

として熱意を注ぐとともに、マダバに次ぐ遺産観光都市の一つとして整備を進めていった。

### 3. 教育

モザイクを通して考古学と地域社会の懸け橋となったピッチリッロ氏の功績の一つに教育を挙げることができる。

ピッチリッロ氏をはじめとする調査隊がマダバを訪れた1980年代当時、遺跡は放置されて管理する者はなく、無造作に遺跡の上に家が建っている状態だったという。1985年、古代のモザイクの都としての姿が次々と明らかになる過程でFAIとヨルダン政府は処女教会やマリア教会、宮殿に遺るモザイクの保存・展示の計画に伴い、モザイクの修復学校を設立することも決定した。1987年には、イタリアを公式訪問していたヨルダン国王夫妻によって、当計画がイタリア政府に伝えられ、マダバ考古学公園及びモザイク学校はイタリア政府とヨルダン政府との協力体制の下始まった。1992年にマダバ・モザイク学校が開校し、1995年には16名の卒業生を輩出した。2007年にはイタリア政府とアメリカ政府の援助を受けて、マダバ・モザイク美術修復研究所として再開した。

入学は高校卒業後から認められる。2年間の課程で、当地域のモザイクに関する保存科学や制作技術を学ぶ。制作



マダバ・モザイク美術修復研究所

技術に関しては、古代で用いられていた方法と現代の方法両面から学ぶことで、モザイクの修復技術だけでなく工芸品としてのモザイクを作る為の技術も身につける。こうした実践授業に加えて、生徒たちは英語やギリシャ語等の語学授業、コンピューターを使用した保存計画、化学、地理学、考古学を学ぶことができる。卒業後は、更に考古学や歴史学を学ぶ為に大学の学士課程に入学したり、モザイク工房に就職する生徒が多い。



修復学校を卒業してモザイク工房で働くマダバの若者

最近では、生徒たちが地元の高校生に対して、2時間程度のモザイク体験教室を運営し、地場産業の担い手育成も行っている。

2000年には同様の施設がピッチリッロ氏監修の下、エリコにも開校された。パレスチナ人がモザイクの修復技術及び制作技術を学ぶと同時に、学校を通して彼らのモザイク工芸品の販売も行われている。

#### 4. 観光

2つ目は、観光の促進である。2002年、ヨルダン世界銀行の支援を得て、「文化遺産・観光と都市開発プロジェクト」Cultural Heritage, Tourism and Urban Development Projectを開始した。ジェラシュ、カラク、マダバ、サルトの4都市で、遺産観光の構築と都市整備が進められている。ピッチリッロ氏の活動はヨルダン政府による観光推進政策よりも10年以上前から行われていた。しかし結果的に、ピッチリッロ氏が推し進めてきた地域社会が中心となって史跡整備や文化財を支えていく体制作りが、ヨルダンの観光事業の基盤となったことは想像に難くない。

遺産観光都市としてのマダバの特徴は「イメージ基本型遺産再生」image based heritage regenerationではなく「場所基本型遺産再生」place based heritage regenerationだと言われている。前者は現在残存しているモノの保存（イメージの保存）といった視覚的な環境整備を優先する手法で、多くのイスラム国家や発展途上国で採られている。対して、後者は地域住民の生活や経済の中に遺産再生を組み込みながら行う手法である。

1973年当時、ヨルダンにはペトラ遺跡とジェラシュ遺跡しか遺産観光資源となりうるものはなかったという。しかし、調査を進めるにつれ明らかになってきたマダバ遺跡の歴史的価値や観光資源としての可能性に着目したピッチリッロ氏は、教会堂遺構やモザイクの保存修復だけでなく、観光資源として活かすための展示や考古学公園計画にも取り組み始めた。1982年に考古学的美術史的価値の高いヒッポリユトス・ホールのモザイク床が検出されると、ピッ

チリッロ氏はイタリアから建築士2名を招聘し、2か月後には考古学公園の計画を始めていた。

文化財を活用した観光開発については賛否両論あるが、こうした地域住民に対する教育活動から経済的にも自立する為の体制作りを研究者が中心となって行ったことは特筆すべきことである。地域住民への教育プログラムと観光資源開発を同時に行うことで、地域住民自身による遺産観光の維持管理体制の確立を手助けしたと言える。

## 5. 普及

3つ目は「普及」であるが、これは英語の *outreaching* に当たる。ピッチリッロ氏はヨルダンに残る古代のモザイクの展示整備や観光課を通して、国内外にその存在を発信しただけではなく、氏が行った調査研究成果をインターネットや論文集、著作、講演会、授業等を通じて学術界に対しても発信していくことで、当該地域のローマ、ビザンツ、ウマイヤ朝時代の信仰や社会の様相に対する関心と理解を促進した。ヨルダンのモザイクに関する著書だけでも *Church and Mosaics of Madaba* (1989年、アラビア語訳1993年)、*The Mosaic of Jordan* (1993年)、*L'Arabie Chretienne* (2002年)、*Madaba Mosaic Map Centenary* (1999年)、*Mayfa'ah Umm al Rasas* (1993年)、*Mt. Nebo* (1998年) 等がある。こうして学術界からの注目度が上がるに伴い、当初はイメージ先行型で保存活用を行っていたヨルダン政府側も、徐々に国内外の学術機関等と協力体制を築いた上で遺産観光の開発整備に着手するようになったという。

また、ピッチリッロ氏は未だ本格的な考古学調査が行われないパレスチナ人自治区においてもSBFとして研究活動や支援活動を行ってきた。特にガザ地区やサマリアでの調査や修復事業は、政治問題の為に滞っている当該地域の考古学や美術史の研究の重要な資料となるだけでなく、紛争地域で文化財を如何に保護していくかという重要な問いかけも含んでいる。

## 6. おわりに

3回に亘り、フランシスコ修道会及びピッチリッロ氏がイスラエルやヨルダンで行ってきた考古学調査と周辺社会との関係性を見てきた。政治的、民族的、宗教的に抗争が絶えない地域で、考古学という手法を活かし、文化財や教育の重要性に対する「認識」を社会から獲得してきたことが、氏が果たしたパブリック考古学における功績といえるのではないだろうか。

2007年に行ったインタビューの最後に、「イスラエルやヨルダンでのキリスト教考古学調査に困難を感じることはないか」と尋ねた。ピッチリッロ氏はその応えとして、2001年にニューヨーク国連本部で行われた「考古学から何を学ぶか」というセミナーでの講演について教えてくれた。

「ウム・アル・ラサス遺跡は、2005年に世界遺産に登録された。登録基準の中心になったのは、もちろんモザイクの普遍的な価値だ。しかし同時に、ウム・アル・ラサス遺跡では、これまで7世紀にイスラム勢力によってパレスチナ地域から駆逐されたと考えられていたキリスト教に関する遺構が検出された。つまり少なくとも、ウム・アル・ラサスでは7世紀以降もイスラム教とキリスト教が共存していたことを示している。国連本部でのセミナー『考古学から何を学

ぶか』の講演でも、ウム・アル・ラサス遺跡の事例を取り上げたよ。『考古学から何を学ぶか』、その答えは「平和」と「共存」だ。

#### 参考文献

Al Rabady, R.

2010 Place-Based Heritage Regeneration in Madaba, Jordan, *Journal of Tourism and Cultural Change*, vol. 8, No. 4, 267-277.

Hamarneh, C.

2010 Fr. Michele Piccirillo, 1944-2008, *Levant* 2009, vol. 41, No. 1, 3-4.

岡田真弓

2008 『イスラエルにおけるキリスト教教会堂の保存と公開に関する研究』（修士論文、慶應義塾大学）

松田・岡村

2005 「考古学の新地平線 パブリック考古学最前線（1）：パブリック考古学の成立と英国における発展」『考古学研究』第52巻第2号、100-103頁。

（慶應義塾大学後期博士課程）

エン・ゲヴ出土のヘレニズム土器 (2)

## フィッシュ・プレート Fish Plate

牧野久実

### おかずと言えば魚

和食器の形は多彩であるが、とりわけ魚を盛り付ける器は特殊といえるかもしれない。主婦の立場から言えば、特に秋の味覚、秋刀魚の季節になると頻繁に使うのが横長で四角い皿である。滋賀に在住していた頃、わざわざ信楽まで買い求めに出かけたことを思い出す。秋刀魚でなくても丸ごと1尾を調理した魚を盛り付けるのに、この横長で四角い皿はとても便利なものである。各国の食器にこうした形態をもつものは恐らく無いのではないだろうか。しかし、海に囲まれ魚食文化盛んな日本ではどこの家庭にも常備している食器であろう。

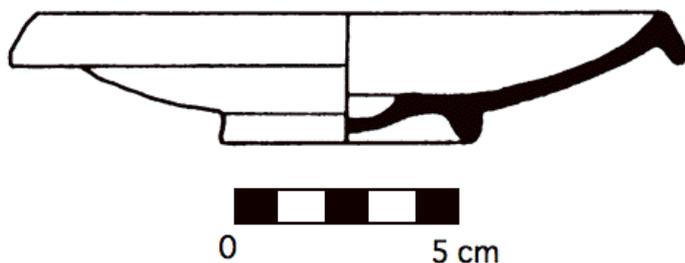
ところで、アテナイオス著『食卓の賢人たち』によると古代ギリシャやヘレニズム時代の人々も大変な魚好きであったらしい（以下、引用は『食卓の賢人たち』から）。

美食家とは魚屋に入り浸っている人のことだ<sup>1)</sup>。

そこへ奴隷達が、海の魚、湖の魚を銀の大皿にのせて、山ほど運んできた。あまりの量に一同は富と贅沢ぶりに驚嘆した。海に棲むもののうち、この家の主が買わなかったのは、海神ネレウスの娘たちだけであろうと思えた<sup>2)</sup>。

われわれは、オブサリオン（料理されたもの）という語を使っているが……オブサリオンは「プロソプセマおかず」の意味で使われている<sup>3)</sup>。

第7巻はほぼ全てが魚料理について記されており、白身魚から青魚、甲殻類に鰻にいたるまでありとあらゆる魚種とそれらに合った調理方法や特徴を詳細に知ることができる。



物を焼こうというときには、あまり弱くちやいかん（そういうとろ火というものは、煮るための火で、焼くときはそれではいかん）。強すぎるのもいかん。それだと表面ばかりが焼けて中まで火が通らないから。……フライパンに魚をのせたからって、料理人じゃあない。料理にはな、学問がいるんだ<sup>4)</sup>。

塩少々、表面にオリーブ油をはき、びりりとするソースに浸して、熱きうちに食せ<sup>5)</sup>。

背に切を入れて、焼いて、ハーブとチーズとシルクイオン（代表的なギリシャの香辛料。チーズに混ぜて使う。註より）と塩とオリーブ油で風味をつけよ、焼くときは、軽く塩をふったうえに油を引き、火から下ろした酢をふる<sup>6)</sup>。

どうやら、シンプルに焼いたり煮たりした魚をソースで食するというものが多かったようである。また、ひしこから作ったメンブラピユエというソース<sup>7)</sup>や小魚をすりつぶして塩水でペースト状にして醗酵させたガロス・ソース<sup>8)</sup>といったいわゆる魚醤も頻繁に使われたようだ。

### フィッシュ・プレートとは

調理した魚を載せる皿について「エウプロスは『せむし男』で、器量よしの皿に……海から来たこの灰色はぜよりも育ちのいい塩水で煮た鱸を1匹乗せて」<sup>9)</sup>と記している。では、ここで器量よしと表現されている皿は一体どのようなものであったのだろうか。

ヘレニズム時代に典型的な土器の1つにフィッシュ・プレートと呼ばれる皿がある。直径は約15～20センチで、口縁部は外に張り出し、その先端は水平もしくは下方へ伸びる。底部はリング状である。また、内側中央部には僅かに窪みが見られるがその直径は底部の直径よりも小さい<sup>10)</sup>。良質な粘土を用いて固く焼成されている。内外共に表面には黒色、褐色、赤褐色などの釉薬が施される。

フィッシュ・プレートの起源は前5世紀～前4世紀にアテネやイタリア南部で作られた絵付きのタイプに遡る。中央の窪みを取り囲むように数尾の魚や貝類を描いたもので、アテネの絵師は魚の腹を外側、すなわち皿の縁側に向けて、イタリア南部の絵師は逆に皿の中央部に魚の腹を向けて描いたという<sup>11)</sup>。この絵柄がフィッシュ・プレートの使い方を示すものだとすると、1匹の魚を中央に盛るのではなく複数の魚を窪みの周りにぐるりと並べるための皿であったと考えられる。外側へ張り出す口縁部は皿からはみ出すほどの魚を支えるための工夫であったかもしれないが、パレスティナからの出土例に魚が描かれたものはこれまでに報告されていない。ヘレニズム時代を含む古代ギリシャ・ローマ世界の魚料理を魚料理には、ハーブ入りの油塩水、桑の実で作ったソース、ハーブとキュミノン入り油塩水、チーズ入りソース、烏賊墨ソースなど、各種のソースを添えて食したことが知られており、内側中央部の窪みはこうしたソースを添えるためのものであったという。フィッシュ・プレートの起源に見られるようなこうした機能がヘレニズム時代にまで同様に受け継がれていたかどうかは不明であるが、少なくとも形態の類似性から絵付きのものと同じ呼び名がつけられている。

フィッシュ・プレートはまさしく魚料理に特化した形態であった。『せむし男』に記された「器量よしの皿」とは恐らくこのフィッシュ・プレートであったかもしれない。

### パレスティナにおけるフィッシュ・プレートの変遷

フィッシュ・プレート<sup>12)</sup>はパレスティナでは前400年頃から現われ始め、前2世紀末頃まで出土する。ドル<sup>13)</sup>では出土したコインから第VA層はヘレニズム時代への移行期(前350年～前275年)、第IVB層はプトレマイオス朝(～前200年)、第IVA層はセレウコス朝(～前125年)、第III層はハスモン朝時代を含むローマ時代への移行期(～前1世紀半ば)とされる。ここではフィッシュ・プレートを4つのタイプの分類し、層毎の変化を詳細に報告している。それによると、前4世紀初め～前3世紀半ば(第VA層)では口縁部の先端が下方へ下がり、胴部が直線状で厚みがある浅皿タイプ(BL4a)で、皿全体の10～20%がこのタイプに相当する。前3世紀と前2世紀全般(第IVB層と第IVA層)では器形がより深く時に中央の窪みの周囲に突帯が巡るタイプ、(BL4b)、やや厚みのある口縁部が外側へ水平に突き出すタイプ(BL4c)、胴部が丸みを帯び、口縁部の断面の形状が三角形を呈するタイプ(BL4d)が主流となる。

テル・ミハル<sup>14)</sup>では第VI層はヘレニズム時代への移行期(前350年～前300年)、第V層は前期ヘレニズム時代(～前200年)、第IV層は後期ヘレニズム時代(～前100年)、第III層はハスモン朝時代(～前50年)で、さらに第III層は前期(第IIIb層)と後期(第IIIa層)に細分されている。このうち、第V層と第IV層から口縁部の先端が下方へ下がるタイプが出土している。第V層のものは口縁部先端の下方への伸びはそれほど大きくないが、第IV層のものはより大きく垂れ下がる<sup>14)</sup>ことが報告されている。

シケム<sup>16)</sup>では第IV層(前325年～前250年)、第III層(B期が前250年～前225年、A期が～前190年)、第II層(～前150年)、第I層(～前110年)とヘレニズム時代で4つの層が見つかっている。このうち第IV層で初めて口縁部の先端が下方へ下がりリング状の底部を有する釉薬のかかったフィッシュ・プレートが出土する。このタイプは第III層でも継続するが、第II層では口縁部に厚みがあり水平に突き出すタイプや口縁部の断面が三角形を呈するタイプ、また、断片のみの出土だが胴部が丸みを帯びると見られるタイプに変化する<sup>17)</sup>。さらに第I層からの出土物として、突帯付きの口縁部が水平に突き出し平底を有する釉薬がかからないタイプをフィッシュ・プレートの延長として報告している。ただし、アナファではこのタイプは蓋とされている。

アナファ<sup>18)</sup>ではヘレニズム時代が2層に分類され、第1層がA期(～前198年)とB期(～前125年)に、第2層がA期(前125年～?)、B期(～前98年)、C期(～前75年)と全体で5期に細分されている。報告者のバーリンはフィッシュ・プレートが本当に魚料理用であったかどうか曖昧だという理由から単に皿(ソーサー)と呼んでいる<sup>19)</sup>。ここでは輸入品で黒色の釉薬を施したやや大きく深い中央の窪みの周囲に突帯が巡るタイプの他に、より粗野な作りだが独特な形態を持つものが出土している。それは、胴部と口縁部の境目に刻み目があり口縁部が水平に突き出すタイプと、胴部と口縁部の境目、そして胴部内側の中程に刻み目が見ら

れやや厚い口縁部の断面の形状が三角形のタイプである。いずれも中央の窪みの周囲がリング状に突き出す。これらは第1B層で最初に出現し、第2A層で最も多く出土している。第2層を中心に主にローマ時代の第1層半ばまで継続する。」。

ベト・サイダ<sup>20)</sup>では第2層が前期ヘレニズム時代～前期ローマ時代として4期に細分されている。出土土器については日常用と輸入品をそれぞれ型式分類する試みがなされているものの、第2層全体で頻繁に建築物が再利用されていることを理由に土器を細分することは行われず、ヘレニズム・ローマ時代として一括報告している。ここでは口縁部の先端が下方へ下がり胴部に厚みがあるタイプと器形がより深く中央の窪みの周囲がリング状に盛り上がるタイプが見られる<sup>21)</sup>。

エン・ゲヴ<sup>22)</sup>でも、断片がほとんどであるが、数多く出土している。建物入り口付近と思われる部屋7からは層ごとに分類することはできないものの、口縁部の先端が下方へ下がり、胴部が直線状で厚みがあるタイプ、器形がより深く中央の窪みの周囲に突帯が巡るタイプ、やや厚みのある口縁部が外側へ水平に突き出すタイプ、胴部が丸みを帯び口縁部の断面の形状が三角形を呈するタイプが出土している。その他の一部の部屋では上層と下層を区別することができ、大半が断片であるが、口縁部が外側へ水平に突き出すタイプ（部屋5の上層）、器形がやや深く中央の窪みの周囲に突帯が巡るタイプ（部屋10の上層から完形が出土、部屋16の上層、部屋17の上層）口縁部の先端が下方へ下がり、胴部が直線状のタイプ（部屋26の下層）が出土している。全体として言えることは口縁部先端の下方への伸びはそれほど大きくない点である。これはテル・ミハルの前期ヘレニズム時代のものと共通する特徴である。一方、前3世紀～前2世紀のドルで見られるような中央の窪みの回りに突帯が巡るタイプや口縁部に厚みがあり水平に突き出す胴部が丸みを帯びるタイプ、口縁部の断面が三角形を呈するタイプと共通する。また、前2世紀後半のシケムに見られるような突帯付きの口縁部が水平に突き出す釉薬をかけない平底タイプは見られない。

フィッシュ・プレートは、前回ご紹介した口縁部が内湾する小鉢と同じく、前2世紀末から前1世紀頃に画期を迎える。フィッシュ・プレートは消滅するか、もしくは小鉢と同様に粗雑な粘土を用い釉薬を施さないタイプとなる。形態は平底で胴部のV字状が際立ち、内側の窪みも大きく、この窪みが無ければフィッシュ・プレートのカテゴリーからは大きく外れるほどの変化である。一方、全体の変遷については、小鉢が形態的な移行期を含みながらも政治的な画期、すなわちアレクサンダーによる征服の時期、プトレマイオス朝、セレウコス朝とほぼ一致する形で変化するのに対し、フィッシュ・プレートはその出現が前4世紀始めに遡ることから、ヘレニズム時代に典型的な器であるものの、ペルシア時代にまで遡って変遷を追う必要があることを示している。またミハルやシケムの事例が示すように、前3世紀末、すなわちプトレマイオス朝の中ほどに画期があり、必ずしも政治的な画期と一致しない。

## 今後の可能性として

もしもフィッシュ・プレートがもともとの機能、すなわち魚を口縁部に沿うように並べて用

いたものだとすると、上に紹介したいくつかのタイプは使い勝手が良くない。特に胴部がやや深いものなどはフィッシュ・プレートと捉えるべきではないのかもしれない。もしくはバーリンが主張しているように、すでに機能が変化した可能性から単に「皿」と呼ぶべきなのかもしれない。

昔の魚料理といえば学生の頃、江戸時代の遺跡で魚骨の分析の手伝いをした時のことを思い出す。遺跡から出土した土壌をふるいにかけて水洗いすると、小さな魚骨が数多く見つかった。それらが何であるのか、またどのような調理法だったかを調べるための補助作業が私の仕事であった。まず近所の魚屋で色々な魚を買ってきては標本を作成し、これをもとに頭骨や中骨などの形状を比較・同定する。出土した魚骨の切断面をよく観察すると、3枚に下ろしたのか、それともぶつ切りにしたのか、つまりどのように調理したのかがわかる。フィッシュ・プレートが仮に魚用の食器だと仮定して、その形態の変化が異なる切断面を残す魚骨を伴うものであれば、調理法の違いや食文化の変化を知る手がかりになるかもしれない。

## 註

- 1) アテナイオス 1997、第7巻8頁。
- 2) 同第6巻296頁。
- 3) 同第9巻389-390頁。
- 4) 同第7巻60-61頁。
- 5) マグロの調理について。同第7巻106頁。
- 6) ホウボウの調理について。同第7巻132頁。
- 7) 同第7巻48頁。
- 8) 同第9巻329頁。
- 9) 同第7巻74頁。
- 10) なお、内側中央部の窪みの無いタイプも見られるが、ドルではこれもフィッシュ・プレートの伝統を持つ鉢と分類している (Type BL5b)。
- 11) Clark et al. 2002, 93.
- 12) 牧野久実「パレスティナにおけるヘレニズム時代の編年に関する一考察～口縁部が内湾する小鉢とフィッシュ・プレートをもとに～」『西アジア考古学』第12号 (掲載予定)
- 13) Stern, E. (ed.) 1995.
- 14) Herzog et al (eds.) 1989.
- 15) Fisher 1989, 178, pl. 13.1-9.
- 16) Lapp 2008.
- 17) Lapp 2008, 293, pl. 3.28, no. 25.
- 18) Herbert (ed.) 1994.
- 19) Berlin 1994, 76-77.
- 20) Arav & Freund (eds.) 1995.

21) Arav & Freund (eds.) 1995, 109-110, pls. II-III; 1999, 61, pl. V.

22) 月本 2009、牧野 2009。

### 参考文献

Arav, R. & Freund, R. A. (eds.)

1995 *Beth Saida*, vol. 1, Thomas Jefferson University Press, Kirksville, Missouri.

Arav, R. & Freund, R. A. (eds.)

1999 *Beth Saida*, vol. 2, Thomas Jefferson University Press, Kirksville, Missouri.

Berlin, A.

1994 The Plain Wares, in Herbert, S. C. (ed.), *Tel Anafa I,i: a Hellenistic & Roman Settlement*, Kelsey Museum of the University of Michigan, Ann Arbor, MI: 1-246.

Clark, A. J. et al.

2002 *Understanding Greek Vases*, The J. Paul Getty Museum, Los Angeles.

Fisher, M.

1989 Hellenistic Pottery (Strata V-III), in Z. Herzog, G. Rapp, Jr. and Negbi, O. (eds.), *Excavations at Tel Michal, Israel*, Tel Aviv: 177-187.

Herbert, S. C. (ed.)

1994 *Tel Anafa I,i: a Hellenistic & Roman Settlement*, Kelsey Museum of the University of Michigan, Ann Arbor, MI.

Herzog, Z. et al (eds.)

1989 *Excavation at Tel Michal, Israel*, Tel Aviv University.

Lapp, N. L.

2008 *Shechem IV. The Persian-Hellenistic pottery of Shechem/Tell Balatah*, The American Schools of Oriental Research, Boston, MA.

Stern, E. (ed.)

1995 *Excavation at Dor. Final report. Volume IA. Areas A and C: Introduction and Stratigraphy*, The Israel Exploration Society, Jerusalem.

アテナイオス

1997 『食卓の賢人たち』柳沼重剛訳、京都大学学術出版会。

月本昭男他（編）

2009 『エン・ゲヴ遺跡 発掘調査報告 1998-2004』リトン。

牧野久実

2009 「ヘレニズム時代の土器」『エン・ゲヴ遺跡 発掘調査報告 1998-2004』月本昭男他編、リトン、119-166 頁。

(鎌倉女子大学教育学部教育学科・准教授)

## 《国際シンポジウム》

### 辺境からの視座

古代ガリラヤの文化諸相とその歴史的意義

Perspective from the Periphery  
Galilee in the Cultural Changes through Ages

日時：2011年5月27日～29日

於：立教大学 太刀川記念館3階多目的ホール

古代ガリラヤの歴史と文化をめぐる国際シンポジウム開催の計画が以下のようなプログラムのもとに進んでいます。大震災の影響で計画の変更も考えられます。その際には会員の皆様には改めてメールで連絡いたしますが、メールアドレスの登録をなさっていない方は本研究会事務局 (israelkai@yahoo.co.jp) までご連絡の上、ご確認ください。

27日

基調講演 (16:00～17:30)

桑原久男 (天理大教授)

Urbanization in the Ancient Galilee

28日

セッション1 (10:00～12:30)

新石器時代・前期青銅器時代

司会 牧野久実 (鎌倉女子大准教授)

Hamoudi Khalaily (Israel Antiquities Authority)  
Yiftahel, a Pre-Pottery Neolithic Site in the  
Lower Galilee

Yitzhak Paz (Ben-Gurion University)

Lower Galilee in the Early Bronze Age:  
Urbanization Process and Settlement Pattern

安倍雅史 (文化遺産国際協力センター)

(題目未定)

門脇誠二 (名古屋大学博物館助教)

Lithic Technology in the Wadi Rabah Period:  
A Perspective from Wadi Ziqlab

セッション2 (14:30～17:00)

後期青銅器時代・鉄器時代

司会 長谷川修一 (立教大学兼任講師)

Stefan Mürger (University of Berne, Bern)

Early Iron Age Kinneret: An Urban Center  
at the Periphery

Zvi Gal (Archaeologist, Galilee, Israel)

Lower Galilee between Tiglath-pileser III and  
the Beginning of the Second Temple Period:  
the Archaeological Perspective

小野塚拓造 (筑波大学大学院博士課程)

Emergence of Mass Oil Production in Galilee  
and Its Socio-Economical Implication

津本英利 (古代オリエント博物館)

Tell Mastuma in the Iron Age II: An  
Aramaean Town in the Periphery

29日

セッション3 (10:00～12:30)

初期ローマ時代

司会 佐藤 研 (立教大学教授)

Sean Freyne (University of Dublin)

(題目未定)

Mordechai Aviam (Kinneret College on the Sea  
of Galilee, Zemach)

Jews and Gentiles in Roman Period Galilee

秦剛平 (多摩美術大教授)

Josephus and Galilee

山口雅弘 (日本聖書神学校講師)

(題目未定)

閉会講演 (14:30～16:30)

Bianca Kühnel (Hebrew University)

Jerusalem as seen from Galilee

□ 第 14 回イスラエル考古学研究会・報告 □

2010年12月18日(土)15:30～

於:八王子市北野南部会館

◇発表◇

山内紀嗣「テル・レヘシュ調査報告」

間舎裕生「エン・ゲヴ調査報告」

佐野真奈美「中期青銅器時代パレスティナ  
地域北部におけるセトルメント・パターン」

山我哲雄 「旧約聖書の象徴世界」



(天理参考館常設展 テル・ゼロール遺跡)

---

### 編集後記

○東北や北関東を突然襲った大震災の中、不安と悲しみに打ちひしがれている方々が大勢いらっしやるに違いありません。しかし、メディアを通して伝わってくる人々の苦痛に耐える姿、生き抜くために必死に前を向く姿に、必ずや復興できると確信しています。そしてその時、未曾有の災害を乗り越えた人々を世界中が誇りに思うことでしょう。考古学徒として、また人間として、何ができるのかを模索していきたいと思います。(M.K.)

○地震、津波、原発被災という一連の震災は未

だ収束の様子が見えてこない厳しい状況にあります。そんな中、不安な日々を過ごしていらっしやる方も多いかと思います。不安になりすぎるのもよくないですが、かといって、不安な気持ちを押し殺しすぎるのも考えもの。いずれにしても、すべてのことで手探りの暮らしが始まるのかもしれない。それにつけても、同位元素との付き合いは年代決定のときだけにしておきたかった。

○11号を機にレイアウトを変更しました。以前よりも学会誌に近いものにしてみました。ご意見をいただきましたら幸いです。今後もたくさんのご寄稿、お待ちしております。(Mi.)

---

イスラエル考古学研究会 ニュースレター No. 11

2011年3月30日

編集: 牧野久実 宮崎 修二

発行: イスラエル考古学研究会

〒171-8501

豊島区西池袋 3-34-1 立教大学文学部月本研究室

e-mail: israelkai@yahoo.co.jp

郵便振替口座

00960-3-79256 イスラエル考古学研究会